

運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する 態度の関係：中学生と大学生の特徴について

中須賀， 巧
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

阪田， 俊輔
九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

杉山， 佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2230695>

出版情報：健康科学. 41, pp.51-58, 2019-03-20. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

—原 著—

運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係 —中学生と大学生の特徴について—

中須賀巧^{1)*}, 阪田俊輔²⁾, 杉山佳生³⁾

Relationships among motivational climates and attitude toward athletic retirement in athletic club activities - Feature of junior high school students and university students -

Takumi NAKASUGA^{1)*}, Shunsuke SAKATA²⁾, and Yoshio SUGIYAMA³⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between perceived motivational climates in sport and attitude toward athletic retirement of students those play team sports or individual sports at junior high school and university. The analysis model served as the basis of our study was as follows: the “motivational climates in sport” affects “attitude toward athletic retirement”. The participants were 385 junior high school students (mean age=13.16±0.91 years) and 406 university students (mean age=19.45±1.22 years). The measures used included a questionnaire regarding motivational climates in sport, and a scale assessing attitude toward athletic retirement. The validity of models was verified using structural equation modeling. As the result, the analysis models demonstrated to be valid. The results of this study suggested the following processes: (1) For students those play team sports at junior high school, the coach’s promotion of performance orientation had a positive influence on attitude of feeling and attitude of perception. In addition, the recognition had a positive influence on attitude of behavioral. The competition had a negative influence on attitude of feeling and attitude of perception. (2) For students those play individual sports at junior high school, the coach’s promotion of task orientation, coach’s promotion of performance

1 兵庫教育大学大学院学校教育研究科, Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, Japan.

2 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター, Health and Sports Science Center, Kyushu Sangyo University, Japan.

3 九州大学大学院人間環境学研究院, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.

*連絡先: 兵庫教育大学大学院学校教育研究科〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

*Correspondence to: Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato City, Hyogo 673-1494, Japan.

E-mail: nakasuga@hyogo-u.ac.jp

orientation, and competition had a negative influence on all factors of attitude toward athletic retirement (attitudes of feelings, perception, and behavioral). In addition, the recognition had a positive influence on attitude of behavioral. (3) For students those play team sports at university, cooperation and recognition had a positive influence on all factors of attitude toward athletic retirement (attitudes of feelings, perception, and behavioral). In addition, the coach's promotion of task orientation had a negative influence on attitude of feeling. (4) For students those play individual sports at university, recognition had a positive influence on attitude of perception. In addition, the coach's promotion of task orientation had a negative influence on attitude of feeling and attitude of perception. In conclusion, in order to enhance a junior high school students and university students for attitude toward athletic retirement, it is important for coaches to promote mastery climate (the recognition) in athletic club activities.

Key words: junior high school students, university students, motivational climates, attitude toward athletic retirement, athletic club activities

(Journal of Health Science, Kyushu University, 41: 51-58, 2019)

はじめに

競技引退は、どのようなレベルの選手であっても、いずれ必ず直面しなければならない発達課題であると言われている¹⁷⁾¹⁸⁾。運動部に所属する選手にとって、その競技から引退することは、選手でなくなる大きなライフイベントとして認識されている。そのようなことから、選手によっては競技引退後にスポーツとの乖離を促す深刻な心的外傷へと発展するネガティブな状態に陥る者もいれば、一方で自己探求や人間的成長またはその変化を促進するといったポジティブな反応を示す者もいる¹³⁾。このような競技引退後の反応をポジティブなものにできるか否かは、選手がどのように競技から引退することができたのかという「質」に由来しているのではないかと考えられる。例えば、自分が所属していた運動部はメンバーに支えられ、そんなチームから離れるのは悲しい、きっと競技引退後もスポーツにかかわり続けようという肯定的な考えを高められるような運動部の体制が必要になる。つまり運動部の指導では、競技力の向上だけではなく、競技からの引退に対する態度形成を目指した教育的指導も求められるだろう。

これまでの競技引退に関する研究は、引退後の生活に焦点が当てられた事例研究やセカンドキャリアを支援する取り組みについて議論されることが多く、競技引退前の予防的・教育的な視点から論じた知見は十分に蓄積されているとは言えない¹⁴⁾。また大場・徳永¹⁴⁾

は、競技引退に対する態度を選手自身や指導者が把握することができる競技引退観検査を開発しているものの、それが他の変数とどのような関係で向上・低下するのかという点については殆ど検討されていないのが現状である。したがって、本研究では競技引退に対する態度形成に関し、予防的・教育的な視点での知見の提供を目指し、運動部のチーム雰囲気づくりに焦点を当てる。

運動部におけるチーム雰囲気を捉える概念の一つに動機づけ雰囲気がある。これは重要な他者(ここでは監督、コーチ、マネージャー、チームメイトなど)によってつくられる雰囲気と定義され¹¹⁾、成績雰囲気(他者との比較を通しての達成を重視する雰囲気)と熟達雰囲気(学習や熟達のプロセスを重視する雰囲気)の2つの側面から、周囲が有する目標の違いを構造的に捉えて検討することができる¹¹⁾⁵⁾。伊藤⁵⁾は、運動部における動機づけ雰囲気について、熟達雰囲気の側面に位置づけられる「コーチの練習支援」、「協調」、「承認」と成績雰囲気の側面に位置づけられる「コーチの能力志向」、「競争」の合計5つの下位尺度からなる調査票を作成している。これまでに運動部における動機づけ雰囲気に着目し、それと他の心理的変数との関係を検討している研究例は国内外通して散見されている。例えば、森年・伊藤⁷⁾は高校生を対象に運動部において成績雰囲気を強く認知する選手ほどセルフ・ハンディキャッピング方略を頻繁に使用することを確認している。ま

た、運動部活動に所属する大学生を対象にした動機づけ雰囲気研究では、選手に熟達雰囲気を知ることが、部活動への適応感や満足感の向上に有効なことなどが報告されている⁹⁾¹⁰⁾。さらに、Boardley and Kavussanu²⁾は、フィールドホッケーやネットボールの選手を対象に動機づけ雰囲気と社会的行動の関連について検討し、成績雰囲気の認知が反社会的行動を促すことを報告している。このように様相の異なる動機づけ雰囲気は、その認知のされ方によって、その後の行動や感情、認知に多様な効果を呈することが予測できることから、競技引退に対する肯定的な態度を育む効果的なチーム雰囲気についても検討できる概念であると考えられる。

なお、運動部において集団種目または個人種目に参加している者では、リーダーシップ¹²⁾やオーバーコミットメント⁶⁾、練習への取り組み⁴⁾などの捉え方も異なることが確認されている。つまり、競技引退に対する態度形成も異なる可能性があり、集団・個人という種目の違いも含めて検討することが必要になると考えられる。

以上のことから本研究では、運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係を、中学生および大学生の集団種目に参加する選手と個人種目に参加する選手ごとに検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象者および調査時期

運動部に所属する中学生と大学生を対象に、201X年5月上旬から9月上旬にかけて調査を実施し、回答に欠損のなかった791名(中学生385名;平均年齢13.16±0.91歳,大学生406名;平均年齢19.45±1.22歳)を分析対象とした。運動部活動種目は、野球,サッカー,バスケットボール,バレーボールなどの集団種目,陸上,水泳,テニス,卓球などの個人種目であった(表1)。

表1 分析対象者の内訳

	集団種目	個人種目	計
中学生	173	212	385
大学生	236	170	406
計	409	382	791

2. 調査内容

2-1. 基本属性

性別,年齢,所属運動部について問う項目を調査票の表紙に記した。

2-2. 運動部における動機づけ雰囲気の測定

運動部の動機づけ雰囲気測定尺度⁵⁾を用いた。この尺度は、「コーチの練習支援(4項目)」、「協調(4項目)」、「承認(4項目)」といった熟達雰囲気と「コーチの能力志向(4項目)」、「競争(4項目)」といった成績雰囲気で構成されている。回答は、「全く当てはまらない(1点)」から「とても当てはまる(6点)」の6段階で評定するよう求めた。

2-3. 競技引退に対する態度の測定

競技引退観検査¹⁴⁾を用いた。この検査は、競技引退に対する態度尺度と競技引退に対する適応資源尺度で構成されている。本研究では競技引退に対する態度面に着目していることから、そのうちの競技引退への態度を3要因から評価する競技引退に対する態度尺度31項目(「感情的態度(13項目)」、「認知的態度(9項目)」、「行動的態度(9項目)」)を使用した。回答は、「よく当てはまる(1点)」から「全く当てはまらない(5点)」の5段階で評定するよう求めた。

なお、2-2.運動部の動機づけ雰囲気測定尺度と2-3.競技引退に対する態度尺度の項目中にある逆転項目を処理したのち、すべての分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査協力者への倫理的配慮として回答は任意であり、得られたデータは研究以外の目的で使用しないことを口頭にて説明を行った。また調査票の表紙に調査内容が強制的ではなく途中であっても辞退できること,中絶しても不利益が被ることは一切ないこと,個人情報特定されないID番号に変換されることを記し,全ての項目への回答をもって同意所得と見なした。

4. 分析モデルの設定

動機づけ雰囲気は、体育授業場面³⁾や運動部活動場面⁹⁾¹⁰⁾の研究において、選手を取り巻く環境認知要因として扱われている。また、競技引退に対する態度は、競

技者に内在する個人要因として捉えることができる概念である。これらを踏まえ、本研究では、運動部における動機づけ雰囲気を独立変数とし、競技引退に対する態度を従属変数としたモデル(図1)を設定した。このモデルにより、チームの雰囲気と選手の競技引退に対する態度との関係を検討することが可能になる。

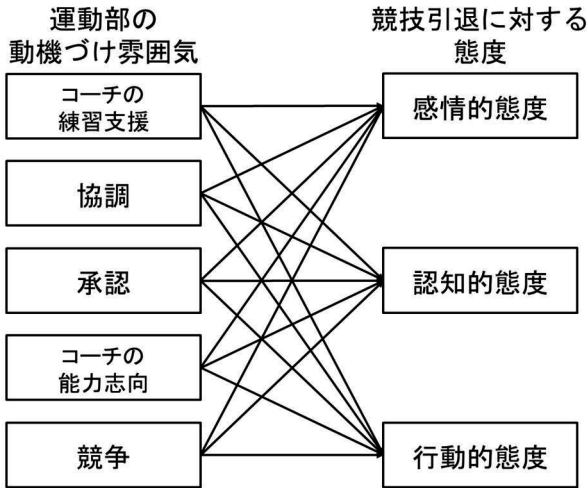


図1 分析モデル

5. 統計解析

基本統計量として、各尺度の平均値および標準偏差を算出した。中学生の集団種目に参加する競技者、個人種目に参加する競技者、大学生の集団種目に参加する競技者、個人種目に参加する競技者での各尺度の得点比較は、一元配置分散分析および多重比較(Tukey法)により検討した。図1のモデル検討は、上記の4群ごとに共分散構造分析を行った。算出されるモデル妥当性の判断基準となる適合度指標には、GFI(Goodness of Fit Index), AGFI(Adjusted Goodness of Fit Index), CFI(Comparative Fit Index), RMSEA(Root Mean Square

Error of Approximation)を用いることとし、それらの基準値はGFIおよびCFIは0.90以上、RMSEAは0.08以下、AGFIはGFIとの差分が小さいこととした⁸⁾¹⁶⁾。有意水準5%のもと、分析にはIBM SPSS Statistics 24.0ならびにIBM SPSS Amos 22.0を使用した。

結果

1. 基本統計量の算出および群による得点比較

運動部の動機づけ雰囲気測定尺度(コーチの練習支援, 協調, 承認, コーチの能力志向, 競争)および競技引退に対する態度尺度(感情的態度, 認知的態度, 行動的態度)の基本統計量として平均値, 標準偏差を群ごとに算出した。次に群による得点の比較を行うために、一元配置分散分析を実施した。その結果、運動部の動機づけ雰囲気測定尺度では、コーチの練習支援($F(3, 790)=3.13, p<.05$)とコーチの能力志向($F(3, 790)=4.71, p<.05$)に群間の有意な差が認められた。これら下位尺度に対して、多重比較を行ったところ、コーチの練習支援は中学生で集団種目を実施する選手(17.11点)の方が、大学生で集団種目を実施する選手(15.90点)よりも有意に高い得点であった。コーチの能力志向は大学生で集団種目を実施する選手(13.82点)の方が、中学生で個人種目を実施する選手(12.25点)よりも有意に高い得点であった。続いて競技引退に対する態度尺度では、感情的態度($F(3, 790)=41.94, p<.05$)、認知的態度($F(3, 790)=22.18, p<.05$)、行動的態度($F(3, 790)=20.07, p<.05$)に群間の有意な差が認められた。これらの下位尺度に対して、多重比較を実施したところ、感情的態度および認知的態度は、大学生で集団種目を実施する選手(順

表2 基本統計量および群による得点の比較

	中学生				大学生				F値	多重比較
	①集団種目(n=173)		②個人種目(n=212)		③集団種目(n=236)		④個人種目(n=170)			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
運動部の動機づけ雰囲気										
コーチの練習支援	17.11	4.60	16.92	4.18	15.90	4.29	16.43	4.70	3.13 *	③<①
協調	16.84	4.81	16.64	3.89	16.69	3.87	17.41	3.95	1.35	
承認	17.77	4.30	17.79	3.88	17.30	3.77	18.03	3.92	1.25	
コーチの能力志向	12.78	4.89	12.25	4.96	13.82	3.95	13.08	4.19	4.71 *	②<③
競争	16.20	4.36	16.81	3.79	16.32	4.08	16.92	3.68	1.52	
競技引退に対する態度										
感情的態度	25.87	6.13	25.77	5.76	30.28	5.19	30.55	6.02	41.94 *	①②<③④
認知的態度	41.25	6.96	40.89	7.25	44.85	6.68	45.60	7.87	22.18 *	①②<③④
行動的態度	29.76	3.31	28.96	3.53	30.72	4.21	31.95	4.60	20.07 *	①<④, ②<③<④

* $p<.05$

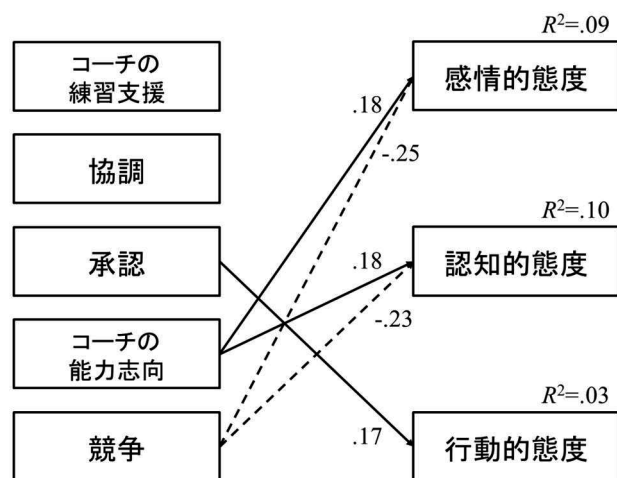
に 30.28 点, 44.85 点), 個人種目を実施する選手(順に 30.55 点, 45.60 点)の方が, 中学生で集団種目を実施する選手(順に 25.87 点, 41.25 点), 個人種目を実施する選手(順に 25.77 点, 40.89 点)よりも有意に高い得点であった。行動的態度は, 大学生で個人種目を実施する選手(31.95 点)の方が中学生で集団種目を実施する選手(29.76 点)よりも有意に高い得点であり, また大学生の個人種目を実施する選手(31.95 点), 集団種目を実施する選手(30.72 点), 中学生で個人種目を実施する選手(28.96 点)の順に高い得点であった。上記結果は表 2 に示す通りである。

2. 動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係

運動部における動機づけ雰囲気を独立変数, 競技引退に対する態度を従属変数としたモデルを, 中学生(集団・個人種目), 大学生(集団・個人種目)の 4 群ごとに検討を行った。以下, 各群の結果を述べることにする。

中学生・集団種目実施選手 (図 2)

モデルの適合度指標は, GFI=.99, AGFI=.95, CFI=1.00, RMSEA=.00 であり, 基準を満たす十分な値であった。モデル内に示す有意なパス係数について述べると, 感情的態度および認知的態度には, コーチの能力志向(順に, $\beta=.18, \beta=.18$)が正の影響を示し, 競争(順に, $\beta=-.25, \beta=-.23$)が負の影響を示した。行動的態度には承認($\beta=.17$)が正の影響を示した。説明力を示す決定係数(以下, R^2)は, 感情的態度は $R^2=.09$, 認知的態度は $R^2=.10$, 行動的態度は $R^2=.03$ であった。



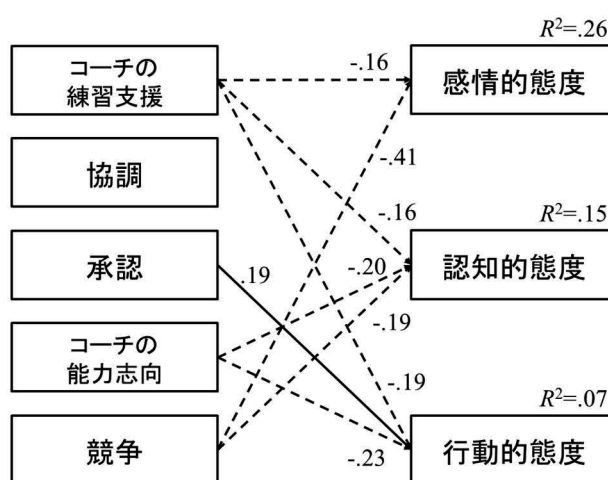
GFI=.99 AGFI=.95 CFI=1.00 RMSEA=.00

※実線は正の係数, 破線は負の係数を示す。

図 2 中学生・集団種目実施選手のモデル

中学生・個人種目実施選手 (図 3)

モデルの適合度指標は, GFI=.99, AGFI=.95, CFI=.99, RMSEA=.03 であり, 基準を満たす十分な値であった。モデル内に示す有意なパス係数について述べると, 感情的態度には, コーチの練習支援($\beta=-.16$)および競争($\beta=-.41$)が負の影響を示した。認知的態度には, コーチの練習支援($\beta=-.16$), コーチの能力志向($\beta=-.20$), 競争($\beta=-.19$)が負の影響を示した。行動的態度には, コーチの練習支援($\beta=-.19$)とコーチの能力志向($\beta=-.23$)が負の影響を示し, 承認($\beta=.19$)が正の影響を示した。 R^2 は, 感情的態度は $R^2=.26$, 認知的態度は $R^2=.15$, 行動的態度は $R^2=.07$ であった。



GFI=.99 AGFI=.95 CFI=.99 RMSEA=.03

※実線は正の係数, 破線は負の係数を示す。

図 3 中学生・個人種目実施選手のモデル

大学生・集団種目実施選手 (図 4)

モデルの適合度指標は, GFI=.99, AGFI=.94, CFI=.99, RMSEA=.05 であり, 基準を満たす十分な値であった。モデル内に示す有意なパス係数について述べると, 感情的態度には, コーチの練習支援($\beta=-.16$)が負の影響を示し, 協調($\beta=.13$)および承認($\beta=.27$)が正の影響を示した。認知的態度には, 協調($\beta=.14$)および承認($\beta=.24$)が正の影響を示した。行動的態度には, 承認($\beta=.29$)が正の影響を示した。 R^2 は, 感情的態度は $R^2=.08$, 認知的態度は $R^2=.11$, 行動的態度は $R^2=.08$ であった。

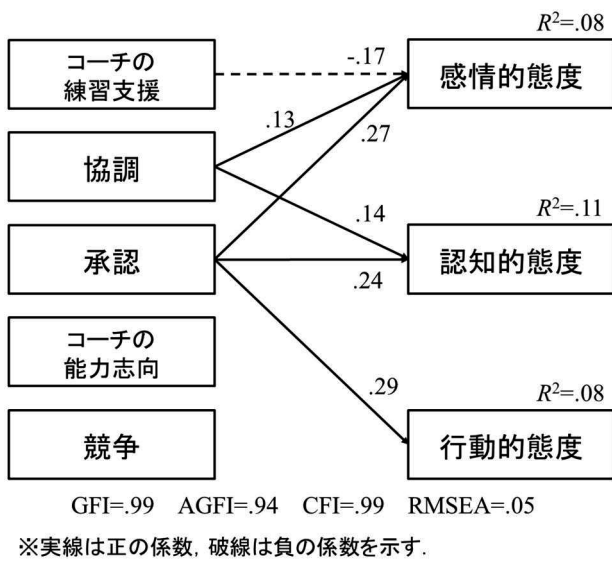


図4 大学生・集団種目実施選手のモデル

大学生・個人種目実施選手(図5)

モデルの適合度指標は、GFI=.99, AGFI=.94, CFI=.99, RMSEA=.05 であり、基準を満たす十分な値であった。モデル内に示す有意なパス係数について述べると、感情的態度には、コーチの練習支援($\beta=-.18$)が負の影響を示した。認知的態度には、コーチの練習支援($\beta=-.16$)、が負の影響を示し、承認($\beta=.14$)が正の影響を示した。行動的態度への有意なパス係数は認められなかった。R²は、感情的態度は R²=.03, 認知的態度は R²=.02 であった。

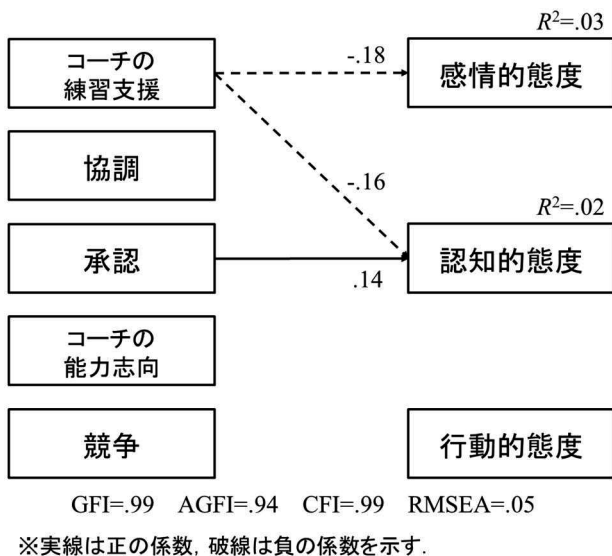


図5 大学生・個人種目実施選手のモデル

考察

運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係を、中学生および大学生の集団種目に参加する選手と個人種目に参加する選手ごとに検討を行った。分析の結果、モデル採択の基準となる各適合度指標は、基準値を満たす良好な値であった。

中学生・集団種目実施選手の特徴について

中学校で集団種目を実施する選手には、コーチの能力志向が感情的態度と認知的態度に、承認が行動的態度にそれぞれ正の影響を示すことが確認された。また競争は感情的態度と認知的態度に負の影響を示すことが確認された。コーチの能力志向や承認が選手に高く認知されている雰囲気では、指導者が上手な選手にばかり注目し、選手に難易度の高い課題を要求するが、一方で頑張りやベストを尽くすことができた選手は認めてもらえ、失敗しても部の誰かからの励ましが得られる状態であると考えられる。こういった雰囲気を認知している選手は、競技引退に対する態度を総合的(感情的・認知的・行動的)に高めることができるのではないかと示唆される。そこには、中学校の運動部において、特に集団種目の特徴が考えられる。例えば、チームの中で試合に出場するレギュラーや非レギュラーは、選手よりも指導者により決定される場合の方が多いことが予想できる。つまり、自分の存在をアピールし、少々困難な課題に挑戦している姿を指導者に見せて注目され、チームメイトからも激励を受け、選手はレギュラーの座を勝ち取るといった一連の流れが想定できる。それは指導者やチームメイトに選手としての能力が認められたことを意味している。そういった選手は自信も高く、引退後に進学する高等学校においても運動部に入部し、肯定的な見通しを持つのではないかと考えられる。一方で、部員同士が互いに競争し合うような雰囲気は競技引退に対して否定的な態度を高めることが示唆される。競争は勝ち・負けの評価をもとに選手の優劣を客観的に把握することができ、チーム内での順位や非レギュラーへの降格、あるいはスタンドでの応援などレベルを明確にされてしまう。自分ではまだプレーできる、試合にも出場したいと考えている選手にとって、競争結果次第では、競技引退の不安を喚起させられ、結果として競技引退についてネガティブ

な態度が形成される可能性もある。

中学生・個人種目実施選手の特徴について

中学校で個人種目を実施する選手には、コーチの練習支援、コーチの能力志向、競争が競技引退に対する態度に負の影響を示すことが確認された。一方で承認は競技引退に対する態度のうち行動的態度に正の影響を示すことが確認された。選手によりコーチの練習支援が高く認知されている雰囲気では、指導者が選手一人ひとりの長所に気づいたり、まじめに練習している選手に激励したりなど、部の人間関係が大切にされているのではないかと考えられる。個人種目の場合、集団種目とは異なり、選手と指導者が二人三脚で試合や大会に臨む場面が多く、フォームやレース展開など指導者からのアドバイスと選手の考えをリンクさせながら競技レベルを高めている。そのため選手が指導者への依存傾向に陥り、引退した後は、もうこの指導者には見てもらえない、次の進学先で出会う高等学校の指導者と良好な関係が育めるのかといった不安が高まるのではないかと考えられる。また先述したコーチの能力志向や競争が強調されている雰囲気においても競技引退が、選手自身が選手ではなくなることに不安を持ち、挫折を象徴するネガティブなイベントとして受け入れてしまう可能性がある。

大学生・集団種目実施選手の特徴について

大学生で集団種目を実施する選手には、協調や承認が競技引退に対する態度(感情的・認知的・行動的)に正の影響を示し、コーチの練習支援が競技引退に対する態度のうち感情的態度に負の影響を示すことが確認された。これは協調や承認が強調されていることを選手が強く認知しているほど、競技引退に対して肯定的な態度を示すことを示唆している。そこには、中学校と異なり、大学運動部における集団種目の特徴があると考えられる。例えば、中学校までの指導者主体の運営から、大学では選手自身が日頃の練習での取り組み方を見てレギュラーや非レギュラーを決定するといった選手主体の運営になる。また大学では学外の指導者や定着した指導者が不在の運動部も少なからず存在し、教員が指導者を務める中学校の在り方とは異なる。そのため、指導者と選手の関係性よりもチーム内外における選手同士の関わりの方が強くなる。まさしく協調

を強調する運動部の雰囲気では、選手自身が規則を作り、それを守ることでチームのまとまりが高まるのではないかと考えられる。また、承認は互いを認め合い、選手同士が切磋琢磨しながら種目に取り組んでいるのではないかと考えられる。つまり協調や承認が高く認知される雰囲気では、自分たちの部で決めた役割や規則を忠実に守り、さらに努力する選手は称讃され、ミスした時や悩みがある時には互いにフォローできる状態であると考えられる。このようにチームとして、選手が相互にかかわりながら取り組める雰囲気を認知できている選手は、競技引退に対しても受容的かつ好意的な態度であることが示唆される。

大学生個人種目実施選手の特徴について

大学生で個人種目を実施する選手には、承認が競技引退に対する態度のうち認知的態度に正の影響を示し、コーチの練習支援が感情的態度と認知的態度に負の影響を示すことが確認された。これは、選手同士が互いに認め合えるような雰囲気だと認知している選手ほど、引退に対する考えを整理し、引退後の新たな道を探ることができるのではないかと考えられる。一方で、コーチの練習支援を強めると、指導者がいることに安心感を持つが、自律的な運動・スポーツへの関わりや選手を続けられるのかといった喪失や不安など否定的に運動部からの引退を捉えることが示唆される。

謝辞

この研究は、笹川スポーツ財団の「平成28年度笹川スポーツ研究助成」の助成金を受けて実施しています。

引用文献

- 1) Ames, C. and Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267.
- 2) Boardley, I.D and Kavussanu M. (2009) The influence of social variables and moral disengagement on Prosocial and antisocial behaviours in field hockey and netball. *Journal of Sports Sciences*, 27, 843-854.
- 3) 藤田勉・杉原隆 (2007) 大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ. 体育

- 学研究, 52 (1), 19-28.
- 4) 石田靖彦・小川久之 (2011) スポーツ系部活動における目標志向性が部活動での取り組みに及ぼす影響. 愛知教育大学研究報告教育科学編, 60, 111-117.
 - 5) 伊藤豊彦 (2001) 高校生における運動部の動機づけ構造の認知に関する研究. 運動心理学の展開. 遊戯社, pp. 148-162.
 - 6) 松井幸太 (2015) 高校運動部活動における生徒のオーバーコミットメントと参加動機に対する自己決定性—性別・学年・競技水準・競技種目からの検討—. 聖泉論叢, 23, 53-64.
 - 7) 森年雅子・伊藤豊彦 (2010) スポーツにおける目標志向性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響. 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 44, 49-57.
 - 8) 室橋弘人 (2003) 分析のよさを評価する—適合度指標概論—. 豊田秀樹編, 共分散構造分析 疑問編. 朝倉書店, pp. 122-125.
 - 9) 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2016) 運動継続のための大学運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の関係. スポーツパフォーマンス研究, 8, 1-13.
 - 10) 中須賀巧・阪田俊輔・田中輝海 (2018) 大学運動部の動機づけ雰囲気, 個人・社会志向性, 部活動適応感の関係. スポーツ産業学研究, 28 (2), 163-175.
 - 11) 西田保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理論の展望. 総合保健体育科学, 31, 5-12.
 - 12) 野上真 (1997) 大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因. 実験社会心理学研究, 37 (2), 203-215.
 - 13) 大場ゆかり (2005) 競技引退に関わるスポーツ心理学的指導・援助. 徳永幹雄編, 教養としてのスポーツ心理学. 大修館書店, pp.192-194.
 - 14) 大場ゆかり・徳永幹雄 (2001) スポーツ選手の競技引退観検査の作成. スポーツ心理学研究, 28, 39-52.
 - 15) Seifriz, J. J., Duda, J. L., and Chi, L. (1992) The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14, 375-391.
 - 16) 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門. 講談社, pp. 174-177.
 - 17) 豊田則成 (2011) アスリートのアイデンティティ形成とキャリア移行. 杉原隆編, 生涯スポーツ心理学—生涯発達の視点からみたスポーツの世界—. 福村出版, pp. 163-173.
 - 18) 豊田則成 (2012) 競技引退のもつ意味. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編, よくわかるスポーツ心理学. ミネルヴァ書房, pp.190-191.